

水にふれ、水に学び、水とともに生きる

川や海で水に触れたり水辺で水の音を聞くとほっとする気持ちになるのは、私だけではないと思います。

それは、人は生まれる前に母親の体内で羊水に生命を守られていること、私たちの身体のおよそ7割が水でできていて、水が循環することにより生きていること、あるいは、陸上の生物も太古の昔をたどれば水中でくらしていたことに、おそらく深い関係があるのでしょう。

いふならば私たちの中には、本来、水を身近に感じることを求める遺伝子があるのだと思います。

福島県は、雄大な猪苗代湖や大小さまざまな裏磐梯湖沼群をはじめ、豊かで良好な水環境を有しており、四季折々に水と緑が織りなす風景など、数々の自然の恵みは、私たち共有の貴重な財産となっています。

私が子どもの頃は、夏休みには友人たちと一緒に毎日阿武隈川で、真っ黒に日焼けしながら、それこそカッパのように泳いでいました。川の淵に潜れば手の届きそうなところにたくさんの魚たちがいました。

また、先人たちは豊かな森林と共生しながら水を慈しみ、水の恩恵に感謝しながら、さまざまな知恵や技術によって、水と一緒に暮らしてきました。私たちが今、水を豊富に使うことができるのは、そうした先人たちのおかげでもあります。

けれども、私たちは高度経済成長期に、便利さや効率を優先するあまり、自然から遠ざかった都市型の生活を求め、身近な川や水源である上流の森林のことを忘れてしまいました。その結果、自然の持つ浄化能力を超えて水を汚し、健全な水の循環システムを阻害することになりました。

一方、世界的に見れば水はとても貴重な資源であり、開発途上国を中心に、約11億人が安全な水を利用することができず、水に起因する病気で毎年220万人以上が亡くなっているといわれています。水はまさに「生命の源泉」であり、安全な水の確保と衛生施設の整備は、国連などで優先課題として議論が進められています。

このような日本と途上国との水環境の違いを考えると、同じ地球社会に生きる人間として複雑な気持ちになります。恵まれた水環境をきれいな昔の状態に戻して、それを保全していくことは、私たちの未来世代からの信託であるとともに、現在、途上国などで水に恵まれない生活を送る多くの人々に対する責務でもあるのではないのでしょうか。

このような思いから、私は、「水との共生プラン」により、50年前のような水と人との身近で良好な関係を取り戻し、「健全な水循環」の継承に取り組んでいきたいと考えています。

水環境保全の取り組みは、効果が現れるまでには長い年月がかかりますが、「水にふれ、水に学び、水とともに生きる」という理念のもと、産・学・民・官が知恵を出し合い、できることから一緒に実践していきたいと考えています。

皆さんも、まず、ご自分の周りの水辺がどのようになっているのか、歩いてみることから始めてはいかがでしょうか。

平成18年7月

福島県知事